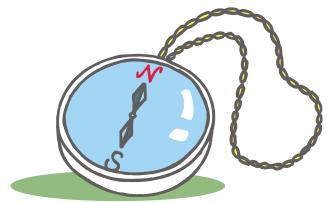


羅針盤



第 10 号

令和6年7月8日（月）

◆ 6月23日「沖縄全戦没者追悼式」より

沖縄戦から79年もの月日が経過し、最後の激戦地となった沖縄県糸満市にある摩文仁（まぶに）にある平和記念公園では、太平洋戦争末期の沖縄戦での犠牲者を悼（いた）む「慰靈の日」（6月23日）に「沖縄全戦没者追悼式」が営まれました。住民を巻き込んだ激しい地上戦の末、20万人以上もの人たちが亡くなり県民の4人に1人が命を落とした昭和20年の沖縄戦。その惨劇は、79年前に米軍が沖縄本島に上陸した次の日から始まっていました。海岸線から余り距離もない読谷村（よみたんそん）にあるチビリガマと呼ばれる洞窟で、隠れていた140人ほどの住民のうち、83人の人が火を放つなどして命を絶ちました。「集団自決」という悲しい出来事。その死者の6割は18歳までの子どもたちであったそうです。耐えがたい悲惨な歴史を経て、今という時があることを、「慰靈の日」に沖縄県の人々が振り返るのと同じく、私たちも今ある平和を顧みる日にしなくてはならないはずです。追悼式の式典では、児童生徒を代表して、沖縄県立宮古高校3年生の仲間友佑（なかまゆうすけ）さんによる平和の詩「これから」が朗読されました。（全文を掲載します。）今というこの平和を継承していく責務が、私たち一人ひとりに課せられた課題であると、この詩は私たちに問いかけているのではないでしょうか。この詩から、私たちが学ぶべき大切なことがたくさんあるはずだと思います。



「これから」

沖縄県立宮古高校3年 仲間友佑

短い命を知ってか知らずか
蝉が懸命に鳴いている
冬を知らない叫びの中で
僕はまた天を仰いだ

あの日から七十九年の月日が
流れたという
今年十八になった僕の
祖父母も戦後生まれだ
それだけの時が
流れたというのに

あの日
短い命を知るはすもなく
少年少女たちは
誰かが始めた争いで
大きな未来とともに散って逝った

大切な人は突然
誰かが始めた争いで
夏の初めにいなくなった
泣く我が子を殺すしかなかった
一家で死ぬしかなかった
誰かが始めた争いで

常緑の島は色を失くした
誰のための誰の戦争なのだろう
会いたい、帰りたい
話したい、笑いたい
そういうら縁り返そうと
誰かが始めた争いが
そのすべてを奪い去る

心に落ちた
暗い暗い闇はあの戦争の副作用だ
微かな光さえも届かぬような
絶望すらもないような
怒りも嘆きも
失くしてしまいそうな
深い深い奥底で
懸命に生きててくれた人々が
今日を創った
今日を繋ぎ留めた
両親の命も
僕の命も
友の命も
大切な君の命も
すべて

心に落ちた
あの戦争の副作用は
人々の口を固く閉ざした
まるで
戦争が悪いことだと
言ってはいけないのだと
口止めするように
思い出したくもないほどの
あの惨劇がそうさせた

僕は再び天を仰いだ
抜けるような青空を
飛行機が横切る
僕にとってあれば
恐れおののくものではない
僕らは雨のように打ちつける
爆弾の怖さも
戦争の「せ」の字も知らない
けれど、常緑の平和を知っている
あの日も
海は青く
同じように太陽が照りつけていた
そういう普遍の中にただ
平和が欠けることの怖さを

僕たちは知っている

人は過ちを繰り返すから
時は無情にも流れていくから
今まで人々は
恒久の平和を祈り続けた
小さな島で起きた
あまりに大きすぎる悲しみを
手を繋ぐように
受け継いできた

それでも世界はまだ繰り返してる
七十九年の祈りでさえも
まだ足りないというのなら
それでも変わらないというのなら
もっともっとこれからも
僕らが祈りを繋ぎ続けよう
限りない平和のために
僕ら自身のために
紡ぐ平和が
いつか世界のためになる
そう信じて

今年もこの六月二十三日を
平和のために生きている
その素晴らしいを噛みしめながら

